

『ショレの赤いハンカチ』由来考 (I)
Sur l'histoire du Mouchoir rouge de Cholet

西 節 夫

はじめに

『ショレの赤いハンカチ』 le Mouchoir rouge de Cholet という、テオドール・ボトレル Théodore Botrel (1868-1925) の歌をご存じだろうか。

自ら un barde errant と形容されるのを好んだこのブルトンの吟唱詩人が、19世紀もまさに押し詰まったパリで、郷土色豊かな衣装と郷愁に溢れた歌で一躍人気者になったとき、本稿でその由来を取り上げる『ショレの赤いハンカチ』も、彼の代表作とされる『パンボールの女』^{ひと} la Paimpolaise などと並んで、大いに当たった歌の一つだった。しかし今日この歌が、いったいどこまで広く知られ、さらには愛唱されているかとなると、筆者ははなはだ心もとないのだが、歌のいわば地元であるショレに限らず、少なくとも、作者と題材にゆかりのある土地⁽¹⁾、すなわち大革命時に、ヴァンデ・ふくろう党の反乱の舞台となった地方では、今もなお多くの人びとに親しまれているに違いない、と推察するばかりである。

筆者が初めてこの歌に出会ったのは、1988年秋にショレを訪れたとき、たまたま入手したショレ市観光協会発行の広報誌——フランスのちょっとした町ならどこでも出している、地元の産業や観光を紹介・宣伝した小冊子を介してであった⁽²⁾。そのなかに『ショレの赤いハンカチ』の歌詞と、歌の由来を述べた短い文章が掲載されていたのである。しかもその短文によれば、ヴァンデの戦いの挿話的事実からボトレルのヒット曲が生まれただけでなく、歌の成功にあやかろうとしてショレの赤いハンカチがデザインされ、「両者がともに世界を駆けめぐって、今日にいたるまで、ショレの最高の宣伝の一つになっている」というのであった。

その秋筆者がショレを訪ねたのは、バルザック、ユゴー、バルベール・ド

ルヴィイなどの作品で知られる、ヴァンデ・ふくろう党の反乱の舞台めぐりの最初の行程としてであって、史実の物語化、伝説化の問題に対する関心から、広範囲にわたったこの反乱について、それぞれの地元でどのように語り継がれているのかを知りたいというのが、戦跡めぐりを企てたそもそもの理由の一つでもあった⁽³⁾。それだけに、『ショレの赤いハンカチ』のテーマをめぐって、単に語り継がれているところではない、史実の物語化から基幹産業化という事態があることを、まさに地元の人間が教えている^{くだん}の短文を、一種の興奮すら覚えながら読んだのを記憶している。また、何軒もの専門店で見かけたショレの赤いハンカチ——赤というよりも朱色の地に白い筋の入ったハンカチで、同じ模様のテーブル・クロスやスカーフも多く目に付いたが、いずれにせよ、その鮮やかな色彩も心に焼き付いている。

本稿ではその目的からして、また構成の点でも、ショレ市観光協会版由来書の吟味が重要な位置を占めており、結果として、この短文が問題点の多いものであること、いや、ほとんど問題点だらけであることを明かすことになる。とはいえ、上記のようなショレでの出会いに感謝する気持ちに変わりはない。なぜなら、それがなかったとしたら、「ショレの赤いハンカチ」のテーマに、筆者がこれほど深い関心を抱くこともなかったに違いないからである。

第一章 『ショレの赤いハンカチ』の歌詞と曲

テオドール・ボトレル作詩・作曲の『ショレの赤いハンカチ』は、いずれもヴァンデ・ふくろう党の戦いに想を得た他の14曲とともに、『“百合”歌集——1793年』Chansons de “La Fleur de Lys” (1793) に収め

られて、1899年に出版された。レンヌ市立図書館所蔵の『“白百合”歌集——1793年』初版本から⁽⁴⁾、その歌詞と曲を転載して紹介すると、次頁の通りである。

ところで、ショレ市観光協会発行の広報誌（1988年度）に掲載されている歌詞には、次頁のそれ、つまり原作とはかなりの異同があって、明らかな改竄^{かいざん}すら見られる。最も目立つのは、句読記号が大幅に省略されていることで、特に感嘆記号にいたっては全部省かれているが、そのために意味を取り違える恐れまではなさそうだし、歌の由来を考察するという本稿の目的からしても、いちいち指摘するのは煩瑣^{はんさ}に過ぎるので、字句の異同だけを見てゆくことにする。

第1節では原作の Oh ! が Ah に変えてあるだけだが、第2節では Dans mon vieux mouchoir すなわち「ぼくの古いハンカチにくるんで」の意が、Près du vieux mouchoir すなわち「古いハンカチといっしょに」、あるいは「古いハンカチと重ねて」に、「夜ごと」の意の chaque nuit が tous les soirs に、さらに「いくさが終わった森のなかで」の「いくさ」Guerre が小文字で始まる guerre にそれぞれ変わっている。第3節で単純過去の donnai 「あげました」が donnais と半過去になっているのは明らかに写し違いかミスプリント、要するに間違いであって、Le plus biau 「一番立派な」の L が小文字になっているのは単純なミスプリントであろう。第4節では de l'autre 「もう一枚は」が du second 「二枚目は」に、また「サーベルを手首から吊す」の動詞 pendre がより具体的な nouer 「(手首に) 結ぶ」に、さらに原作では Le petit mouchoir と単数形に、つまり、胸(心臓)の上に着けたハンカチだけに「日がな一日青たちは狙いをつけた」となっているのが、Les petits mouchoirs と複数形に、つまりハンカチ全部が標的にされたことにそれぞれ変わっている。

CHANSONS de "LA FLEUR DE LYS"
(1795)

LE MOUCHOIR ROUGE DE CHOLET

A Madame la Baronne de CHARENTE

Marziale

PIANO

The piano introduction consists of two staves of music. The right hand features a rhythmic pattern of eighth notes and sixteenth notes, while the left hand provides a steady accompaniment of eighth notes. The piece is marked 'PIANO' and 'Marziale'.

Sans lenteur.

The first vocal line begins with the lyrics: "J'a-rais a-cheté, pour ta fé-te, Trois petits mouchoirs de Cho-". The piano accompaniment is marked 'pp' (pianissimo) and features a simple harmonic accompaniment.

al. lib.

The second vocal line continues with the lyrics: "-let, Rouges comme la ce-ri-set-te. Tous les trois, ma mie Au-". The piano accompaniment continues with a similar harmonic structure.

tempo

Aux couplets

The third vocal line concludes with the lyrics: "-net-te, Oh! qu'ils é-taient dou-ces jo-li-ets - Les petits mouchoirs de Cho-". The piano accompaniment features a more active rhythmic pattern, reflecting the 'tempo' marking.

Pour finir

2

Ils étaient là, dans ma poquette,⁽¹⁾
 Dans mon vieux mouchoir blanc...si laid!
 Et chaque nuit, la Guerre faite,
 Dans les bois, ma mie Annette,
 En rêvant de toi, je rêvais
 Aux petits mouchoirs de Cholet!

3

Les a vus, Monsieur de Charette,
 Les voulut: je les lui donnai...
 Il en mit un dessus sa tête
 Le plus biau; ma mie Annette!
 C'était le plus fier des plumets...
 Le petit mouchoir de Cholet!

4

Fit de l'autre une cordelette
 Pour pendre son sabre au poignet;
 Fit du troisième une bouclette
 Sur son cœur, ma mie Annette,
 ...Et tout le jour les Bleus visaient.
 Le petit mouchoir de Cholet!..

5

Ont visé le cœur de Charette...
 ...Ont trouvé... celui qui l'aimait!
 Et je vas mourir, ma pauvrette,
 Pour mon Roy, ma mie Annette...
 Et tu ne recevras jamais
 Tes petits mouchoirs de Cholet!..

6

Mais, qu'est-ce là, dans ma poquette?
 C'est mon vieux mouchoir blanc...si laid!
 Je te le donne pour ta fête,
 Plein de sang, ma mie Annette:
 Il est si rouge qu'on dirait
 Un mouchoir rouge de Cholet!

(1) Il désigne la poche intérieure gauche de sa veste.

次の第5節では Pour mon Roy 「ぼくの王様のために」が Loin de toi 「君から離れて」に変わっているだけであるが、おそらく最も興味深い異同、いや完全でしかも見事な改竄であろう。政治情勢にあわせて変えざるを得なかった面があったにせよ、この改竄によって、王党主義のシンガーソングライターが、国王のための戦いから着想した歌であることなどあまり意識しないで、誰もが口ずさみ易いラブソングへと変質している。第2節で Guerre が guerre に変わっていることにも、特定の戦争意識を希薄化する効果があろう。最終節の異同は、sang 「血」の s が大文字になっていることだけである。

ついでながら、Jean-Clément Martin: Blancs et Bleus dans la Vendée déchirée, 1987, にも『ショレの赤いハンカチ』の歌詞が紹介されており⁽⁵⁾、こちらは上記の原作と句読記号が数箇所違っているだけであるが、ただ、どうしてか、第3節の Le plus biau が Le plus bien となっている。標準語風に改めるなら Le plus beau であろう。

第二章 ショレ市観光協会版由来書

『ショレの赤いハンカチ』の由来について、まず、ショレ市観光協会発行の広報誌（1988年度）に、歌詞とともに掲載されている由来書から見とゆくことにする。原文は次の通りである。

L'HISTOIRE DU MOUCHOIR ROUGE DE CHOLET

C'est au cours du concert annuel de l'Orphéon local, le dimanche 29 avril 1900, que le célèbre barde breton Théodore Botrel chanta

pour la première fois sa composition : “le Mouchoir Rouge de Cholet”.

Sa chanson est basée sur un fait réel : en effet, le 17 Octobre 1793, la grande bataille de Cholet oppose d'un côté d'Elbée, Bonchamps, La Rochejacqueleïn, Stofflet, de l'autre Beaupuy, Travot, Marceau, Kléber avec les Mayençais.

Henry de la Rochejacqueleïn porte à son chapeau, sur sa poitrine et à son côté, trois mouchoirs blancs de Cholet afin de mieux se faire reconnaître de ses hommes, mouchoirs qui le désignent tout aussi sûrement aux balles républicaines.

C'est cet acte de bravoure que Botrel a voulu immortaliser en l'attribuant, sans doute pour la rime, à M. de Charette.

Un fabricant choletais avisé : Léon Maret, profite du succès extraordinaire de la chanson pour créer le mouchoir rouge de Cholet : le rouge veut symboliser le sang des Vendéens, le blanc, c'est pour perpétuer le souvenir de ces “Blancs”, qui tinrent tête si longtemps aux “Bleus”.

Léon Maret en offrit à Théodore Botrel qui, à son tour et pour accompagner la chanson, en offrit à ses amis des cabarets de Montmartre.

C'est ainsi que la chanson, comme le mouchoir, ont fait le tour du monde et constituent encore à ce jour l'une des meilleures publicités pour Cholet !

結論めいたことを先に述べると、この由来書は、「歌」ならびにヴァン

デ戦中の「史実」という二つの事実との関係において、いかにも問題点の多い文章である。わざわざ原文まで紹介したのもそのためであるが、「史実」との対比はなるべく次章に回して、本章ではもっぱら「歌」との関係から検討してゆく。

本由来書の内容＝情報は、伝えられている順に、以下のように5項目に分けて理解されるだろう。

- ① ボトレルが『ショレの赤いハンカチ』を初めて歌ったのは、1900年4月29日、地元、つまり当地のオルフェオン合唱団の年次コンサートにおいてであったこと。
- ② この歌は事実に基づいていること。すなわち、1793年10月17日、ヴァンデ軍と共和政府軍がまみえたショレの大会戦に、ヴァンデ軍の司令官の一人であったアンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭は、部下の兵士たちに自分の所在がよく分かるように、(初めて、)ショレの白いハンカチを帽子と胸のところと腰に着けて臨んだが、この三枚のショレの白いハンカチのために、同じように確実に共和政府軍の銃弾的になったこと。
- ③ ボトレルはこの勇敢な行為を不朽のものにしようとしたのであって、アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭をシャレット殿に替えたのは、おそらく韻の都合によると思われること。
- ④ レオン・マレというショレの織物製造業者が、この歌の空前の成功に便乗しようとして、ショレの赤いハンカチを創作したのであって、赤色はヴァンデの反徒たちの血を象徴し、白色は、共和政府軍に長いあいだ抵抗した王党軍の思い出を、永遠に残そうとしたものであること。
- ⑤ レオン・マレがこのハンカチをボトレルに贈ったことから、ボトレルの出演していたモンマルトルの芸術酒場を出発点にして、『ショレの赤

いハンカチ』の歌とともにハンカチのほうも世界に知られるようになり、両者は今日にいたるまで、大いにショレの宣伝に役立っていること。

まず、小さな問題点は第一項目についてである。

『ショレの赤いハンカチ』が世に出た経緯は、ポトレル自身の『回想』*Souvenirs d'un barde errant* によってかなりはっきりしている⁽⁶⁾。それによると、1897年のことであったというが、同じくブルトンで、当時王党主義の熱心な運動家であったケルゲゼック子爵⁽⁷⁾に勧められて、彼はわずか一週間ばかりで、ヴァンデ・ふくろう党関係の他の2曲とともにこの歌も完成して、翌月の聖フィリッポの祝日、すなわち5月11日には、ヴァンセンヌ近くで開かれた貴族たちの宴席で初披露したのであった。この初披露の大成功によって、貴族たちの祝宴に始終協力せざるを得なくなり、つまり大いに歌われたあげく、翌年にはこれらの曲も『“白百合”歌集』にまとめられて、上梓されたのであった。またポトレルは、『ショレの赤いハンカチ』が縁で、シャレットの末裔であるアタナーズ・ド・シャレット将軍⁽⁸⁾(この歌はその夫人に献じられている)の友情を得て、将軍の軍人仲間たちといっしょに、パリ、ブルターニュ、カンヌなどの会合にも出席しているが、それも「将軍お抱えの吟唱詩人」としてであったから、おそらくその都度、他のどんな曲にもまして、彼はこの歌を歌った、いや、歌わざるを得なかったに違いないのである。

『“白百合”歌集』が出版されたのは1899年だから、ポトレルの『回想』には一年の記憶違いがあるように思われるとはいえ、『ショレの赤いハンカチ』が世に出た事情については、上に見た通りであるに相違ない。

もちろん彼は、こんな限られた人びとだけを前にした、非公開の場だけでなく、モンマルトルの《黒猫》*Chat Noir*をはじめとする芸術酒場でも、この歌をただちに歌い、そして大いに受けたのではあるまいか。というの

は、これもボトレルの『回想』によると、彼が《黒猫》のプログラムに正式に載せられたのは1895年—1896年のシーズンからで、その後、同じくモンマルトルの《タバラン劇場》Tréteau de Tabarinやカルチェ・ラタンの《夜遊び人》Noctambulesなどでも歌うようになるが、おそらくどこでも彼は、ブルトンという出自だけでなく、いわば時流に抗して、王党派であることをむしろ看板にして人気を博すと同時に、次々にヒット曲を出す必要に迫られていたからである。

こうした確かな、ないしは当然推測される事情と由来書の第一項目、すなわち、ボトレルがこの歌を初めて歌ったのは、20世紀初年のショレであったとはどう折り合うのだろうか。

この由来書の最も大きな問題点は、第二項目に関してである。そこでは『ショレの赤いハンカチ』が想を得た挿話的事実として、アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭がショレの白いハンカチを、帽子と胸と腰のところに、各一枚ずつ着けて戦いに臨んだと伝えている。腰のところには、ちょっと曖昧な表現だが、おそらく腰に下げたサーベルにハンカチを結わえていた——いざというときには、歌にあるように、サーベルを手首から吊す細紐代わりにするために——というのであろう。したがって、ハンカチの着け場所とそれに枚数もとにかく歌詞と一致していよう。ところが、肝心のハンカチの色が挿話的事実においては赤でなく、白であったとされているのだ！ —瞬誤植ではないかと疑いたくなるが、もちろんそうではない。もしこれが「赤」の誤植だったとしたら、第四項目の情報、すなわち抜け目のない地元の製造業者による、ショレの赤いハンカチ創作＝誕生の話は成り立たなくなるし、第五項目の情報までも大いに怪しくなるからである。

『ショレの赤いハンカチ』の由来に関するヴァンデ戦中の「史実」につ

いては、次章で詳述するが、アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭が着けていたショレのハンカチの色だけをここで明かすと、歌詞通りに、赤だったのである。いったい、この由来書をどう読めばよいのだろうか。

ところで、ボトレルはなぜラ・ロシュジャ克蘭をシャレットに替えてしまったのであろうか。前者がオー＝ポワトゥーの人間でショレ地方を中心に戦ったのに対して、もともとはブルターニュ出身、つまりブルトンのシャレットは、妻の縁でバ＝ポワトゥーをいわば縄張りにはしていたのであって、ショレの大会戦にも参加していないのである。それだけになおさら、この交替にはよほどの理由があったに違いないと思われるのだが、ボトレル自身は『回想』のなかで、『ショレのハンカチ』では「私はシャレットの姿を描き出している」と述べているだけで、いや、そう述べていながら、ラ・ロシュジャ克蘭を彼に替えたことについてはまったく触れていない。

この点について、由来書の第三項目は「韻の都合」という、5項目のなかで唯一情報ではなく解釈を示している。実際、ボトレルの作品では「リズムがすべてにまσαっている」と評されること⁽⁹⁾と考え合わせながら、『ショレの赤いハンカチ』の見事な韻の踏みようを追ってゆくとき、確かに「韻の都合」説はきわめて説得的に思われるのである。

しかし、筆者には、はたして韻の都合だけで、アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭の代わりに、歌における挿話的事件の行為者としてシャレットが選ばれたのか、という疑問が残る。すなわち、この選択と交替には、韻の都合に加えて、ボトレルの彼らに抱いていたイメージもからみあざうっているのではないか、という疑問である。

例えば、『ショレの赤いハンカチ』の歌詞は、次のように、恋する兵士である「ぼく」の恨み節として読むことができよう。すなわち「ぼく」は

恋人の誕生祝いに贈ろうと、ショレの赤いハンカチを三枚買い求めて、上着の内ポケットに、自分の使い古した白いハンカチにくるんでしまっていたのだ。ところが司令官のシャレット殿がそれを見つけて、三枚ともいわば召し上げられたあげくに、「ぼく」は銃弾を浴びて死んでゆこうとしているのである。恋人に再会することはもはやない。そしてせっかく買ったショレの赤いハンカチが恋人の手に渡ることも決してない。その代わりに、せめてぼくの上着の内ポケットに残っている汚れた白いハンカチを、恋人にあげよう。だって、今ではぼくの血に染まって、あのきれいなショレの赤いハンカチそっくりなんだから——というのだから。

実事がらみになるが、問題は、ここで想定されている司令官—領主貴族と部下の兵士—領民との関係である。それは、ヴァンデ軍の司令官のなかでただ一人、兵士たちから姓ではなく、Monsieur Henri と名で呼ばれ、伝説的にも、彼らから最も愛された司令官とされているラ・ロシュジャクランよりも、親密さと専横ぶりとをないまぜて、部下の掌握に腐心したシャレットの場合にはるかにふさわしく思われる。ボトレルは当然そのことを考えた、少なくともそのことが大いに気になった結果の、「選択交替」ではなかったであろうか。

あるいはもっと単純に、この種の恋がらみの歌に登場させるのに、きわめてストイックな二十歳の若者であったアンリよりも、三十代前半の男盛りで、常にアマゾネスに囲まれて戦い、いわゆる艶聞の多さではヴァンデ軍中随一であったシャレットの方がふさわしい、といった判断もあって、ボトレルは両者を交替させたのではないかとも思われるのである⁽¹⁰⁾。

第三章 史実の物語化——その1

本章では、まず、ボトレルが『ショレの赤いハンカチ』の想を得た「挿話的事実」について検証したうえで、史実の物語化という観点から、二つのアンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭伝において、「アンリとショレの赤いハンカチ」のテーマがどう扱われているかを、次章にかけて見てゆくことにする。

ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人は、ヴァンデ軍の司令官の一人で、アンリとはいとこ同士だったレスキュール侯爵の未亡人であり、アンリの弟ルイと再婚したあと、1814年の王政復古直後に『回想録』を公刊して、ヴァンデの反乱の最も意欲的で、かつ最も世に知られた語り部となったが、彼女はそのなかで、アンリの赤いハンカチ（正確には、スカーフあるいはネックチーフ、要するに foulard である）に二度言及している。ただし二回目は、1848年に出た第六版の著者注においてである。

最初の言及から見よう。夫人は、反徒たちがヴァンデ県の県庁所在地であったフォントネーを占領した（1793年5月25日）のに続いて、ソーミュールをも陥落させ（同年6月10日）、いわばその勢力が頂点に達した時期の彼らの物資状況について回想しているが、その最後のところで次のように述べている。

Les étoffes nécessaires ne nous manquaient point; nous avions de gros drap de pays, des siamoises, des toiles, des mouchoirs rouges en quantité: il y a une multitude de fabriques, de ce genre dans la Vendée. Les mouchoirs rouges étaient devenus d'un usage général pour les hommes et les femmes, depuis le combat de Fontenay: on

avait su que M. de La Rochejaquelein, en ayant toujours un sur la tête, un au col et plusieurs à la ceinture pour mettre des pistolets, avait été désigné aux Bleus sous ce costume pour qu'ils le visent. Les officiers le supplièrent de les quitter, et, n'en pouvant venir à bout, ils en prirent tous, cela devint une mode générale; avec leur habillement, qui était pour presque tous un gilet et des pantalons, chacun à sa fantaisie, des bottes, un chapeau rond et un grand sabre à la hussarde, les jeunes gens avaient l'air de brigands, comme les Bleus les nommaient ⁽¹¹⁾.

ラ・ロシュジャ克蘭夫人の二度目の言及、つまり注記のほうは、ショレの会戦に敗れるやいなや、その翌日には、6万にも上るヴァンデの反徒たちがロワール河を渡り、2か月余りも北西部のいわゆるガレルヌの地をさすらったあげく、遂にブルターニュのサヴネーで政府軍に捕捉・^{せんめつ}殲滅される（1793年12月23日）、まさにその直前の時期の回想部分に付されている。こちらは訳文で紹介するにとどめるが、参考までに、その時期、アンリはごく少数の部下とアンスニからロワールを再渡河したまま消息を絶ち、残された彼女たちは一年余りに及ぶ潜伏生活に入る運命にあったことを記しておく。

ノールで、間違った警報のためにちょっとした混乱が生じたが、その最中に召使たちが去っていったあとは、私たちはもう自分の鞆囊もない始末だった。そこで、アンリの鞆囊を開けてみた。というのは、アンリの従者たちも、主人がロワール河を渡ってしまったあと、アンスニからは私たちと行動を共にしていたからである。彼の鞆囊には、馬具のたぐ

いと何枚かのショレの赤いスカーフ以外にはめばしいものはなかった。サヴネーで農婦姿に変装した際、私はそのスカーフの一枚を首に巻いた。そして以後は、毎日曜日にそれを着けるようにした。ブルトンたちが、毎日着けるには立派すぎるといったからだ。特赦を受けた折、そのスカーフがアンリのものであったことを思い出して、大事に仕舞った。そして、結婚したときに、それをラ・ロシュジャ克蘭氏にあげた。すると彼は、すぐに私の髪の毛をそれに縫い込ませた。彼は時折ふざけて、それを自分の頭や私たちのあいだに生まれた息子アンリの頭にちょっとのあいだかぶせたりしていた。以上の理由すべてからして、私の孫息子はこのスカーフを大いに大切にしなければならないのである⁽¹²⁾。

第二の言及は、いわばアンリのショレの赤いスカーフに関する後日譚であるが、それによって、第一の言及が格別の意味を帯びてくること、今は本稿の目的に限っていえば、その記述内容が、ポトレルの『ショレの赤いハンカチ』を生んだ「挿話的事実」に関する証言として、換言すれば史実に関する第一次的資料として、いちだんと重みを増すことは指摘するまでもないであろう。

ところで、ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人『回想録』の初版本《Mémoires de Mme la marquise de La Rochejaquelein, écrits par elle-même, rédigés par M. le baron de Barante》は、先に触れたように1814年に刊行されたが、その後著作者の資格をめぐる対立から、1889年にもっぱら夫人の自筆原稿による『回想録』(以後、L版と略記)が、続いて1910年にはバラントの原稿によるもの(以後、B版と略記)が出版されている。第一の言及として上に掲げた原文はL版によったが、B版では次のように記述されている⁽¹³⁾。

Quant aux vêtements, les magasins étaient fort abondants : ils étaient en gros drap du pays, en toile, en coutil, en siamoise. On faisait surtout une grande dépense de mouchoirs rouges ; il s'en fabriquait beaucoup dans le pays et une circonstance particulière avait contribué à les rendre d'un usage général. M. de la Rochejaquelein en mettait ordinairement autour de sa tête, à son cou, et plusieurs à sa ceinture pour ses pistolets : au combat de Fontenay, on entendit les Bleus crier : «Tirez sur le mouchoir rouge.» Le soir, les officiers supplièrent Henri de changer de costume ; il le trouvait commode et ne voulut pas le quitter. Alors ils prirent le parti de l'adopter aussi, afin qu'il ne fût pas une cause de dangers pour lui. Les mouchoirs rouges devinrent ainsi à la mode dans l'armée ; tout le monde voulut en porter. Cet accoutrement, les vestes et les pantalons, qui étaient l'habit ordinaire des officiers, leur donnaient tout à fait la tournure de brigands, comme les appelaient les républicains ⁽¹⁴⁾.

それでは、L版とB版の証言によって、「アンリとショレの赤いハンカチ」のテーマについて史実を確認しよう。まず、L版の記述は本稿の目的に合わせて次のように要約することができる。「必要な布類にはまったく事欠かず、地元製の赤いスカーフも大量にあったが、フォントネーの戦い以来、その赤いスカーフが男女を問わず流行になっていた。というのは、ラ・ロシュジャ克蘭氏が、いつも頭と首に一枚ずつ、またバンドのところには、ピストルをはさむために、何枚もの赤いスカーフを巻きつけていて、それで自分を目立たせて青に狙わせようとしていることが、知れ渡ったからだった。士官たちは彼に赤いスカーフをとるよう頼んだが、説得

できなかったので、彼ら全員が着けることにし、それが一般の流行につながったのである。赤いスカーフを着けた若い士官たちは、彼らのいつものいでたちとあいまって、青が付けたあだ名通り、いかにも山賊みたいだった。」

B版の記述もL版と同じように、まず、地元製の赤いスカーフが豊富にあったことを伝えたあと、それを大いに流行らせることになった「アンリの赤いスカーフ」について、その着け場所も枚数も、史実は、『ショレの赤いハンカチ』の歌詞とは違っていることを証言している。すなわち、ラ・ロシュジャ克蘭は、一枚を帽子に飾ったのではなく頭に巻きつけていたのであり、二枚目も胸に着けていたのではなく首のところに、文字通りネックチーフとして用いていたのであって、さらに一枚ではなく数枚を、それもサーベルを手首から吊す細紐代わりなどという、きわめて不自然な使い方ではなく、バンドの上に巻きつけてそこにピストルを差し込んでいたのであった。そのアンリを真似た士官たちがいかにも山賊風だったという結びも、L版と合致している。

一方、B版がL版と違っているのは、まず、「フォントネーの戦いで、青が《あの赤いスカーフを狙え》と叫ぶのが聞こえた」と述べられていること、次に、士官たちがラ・ロシュジャ克蘭に赤いスカーフを外すように頼んだのが、フォントネーの戦いの終わったその夜であったとされていること、最後に、ラ・ロシュジャ克蘭が赤いスカーフを用いる理由として、それが便利だから（L版のように、単に敵に自分を狙わせるため、というのではなく）と彼自身が答えたという、以上三点である。バラントは元ヴァンデ軍兵士たちに積極的にいわゆる聞き取り調査をおこなっているから⁽¹⁵⁾、この三点はおそらく彼の想像によるのではなく、実際にこの戦いに参加した者から聞いた話によっていると思われるが、いずれにせよ、

すでにここから、「アンリとショレの赤いスカーフ」をめぐる史実の物語化が始まっているといえよう。ただし、それはいわゆる「回想録」のもつ自伝性の希薄化、ないしは自伝的制約からの解放という意味においてである。なぜなら、そこでは主人公の体験しなかったことが、おそらく当時のレスキュール侯爵夫人が知らなかったことまでもが、事実として、きわめて客観的に叙されているからである。

次にこのテーマが、アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭の伝記作家たちによってどう展開されているかを見よう。取り上げる二作は、いずれもアンリ伝として定評のあるものだが、まず、きわめてロマネスクでないという意味で物語性の薄い、*Françoise de Chabot: Henri de La Rochejaquelein et la Guerre de la Vendée*, 1890 の場合である。

Il était important de maintenir l'ordre et la discipline dans la ville, Stofflet fut nommé commandant de la place. Aucun uniforme n'avait encore été adopté par les généraux, et nul insigne ne les distinguait des soldats. A ce dernier combat, Henri ayant porté autour de sa tête, à son cou et à sa ceinture des mouchoirs rouges de Cholet, plusieurs officiers vinrent, le soir, le supplier de quitter cet accoutrement, lui disant qu'ils avaient entendu les Bleus crier : «Tirez sur les mouchoirs rouges.» Comme il n'en voulut rien faire, les officiers adoptèrent cette mode, d'un commun accord ⁽¹⁶⁾.

一行目の *la ville* はフォントネーのことで、四行目の *ce dernier combat* はフォントネーの戦闘を指すが、この記述は、ラ・ロシュジャ克蘭夫人『回想録』B版の証言が提示している物語的な枠内にいわば留

まっぴょう。フォントネーの戦場における青たちの叫び声しかり、また士官たちがアンリにかけあったのが「その夜」であったという、時間的な設定においてしかりである。ただし、次の三点は新しい要素である。まず、赤いスカーフが秩序・軍律の維持の必要にからめて、司令官であることを示す記章として重視されているように思われることであって、アンリが赤いスカーフを着けた理由について、上記 L、B 版とは違って、むしろ「部下の兵たちに自分の所在がよく分かるように」という、ショレ市観光協会版由来書に通じる解釈を提出していよう。次にアンリの着けていたスカーフの枚数が部位ごとに示されていないこと、そして最後に、L、B 版の証言が、アンリはすでにフォントネーの戦闘の前から赤いスカーフを着けていたと読まれるのに対して、ここではもっぱらフォントネーの戦いに限定して語られていて、アンリがそれ以前から赤いスカーフを用いていたかどうかについては、なんらの示唆もなされていないことである。

青たちの叫び声と「その夜」という時間的な設定とが、B 版からアンリの赤いスカーフの物語化が発しているともみなし得る証左であるのに対して、上述の新しい要素のうちの最後の二点は、明らかに、史実の物語に対する制約の緩和を示しているであろう。 (第三章了)

[注]

- (1) テオドール・ボトレルは Saint-Malo に近い Dinan で生まれ、Finistère 県の Quimper に近い Pont-Aven で没した。ショレについては紹介するまでもないが、Maine-et-Loire 県の郡庁所在地で、Mauges 地方 (旧アンジュー州のロワール河南岸区域) の行政・産業の中心地、往時から織物業で知られる。

- (2) この広報誌《Cholet》はカラー刷り、39頁から成り、『ショレの赤いハンカチ』の歌詞は8頁に、由来は7頁に記載されている。
- (3) この戦跡めぐりの理由、行程などについては、成城大学大学院文学研究科『ヨーロッパ文化研究』第9集掲載の拙稿「ガレルヌの彷徨を追って——ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人『回想録』抄——序章」の42-44頁を参照されたい。
- (4) Théodore Botrel: Chansons de “La Fleur-de-Lys” (1793), Préface de Georges d’Esparbès, Couverture Aquarelle et Quinze Lithographies hors texte, sur vélin, de E. Hervé Vincent, Paris, Georges Oudet, 1899, pp. 32-33.
- (5) p. 152. なお本書は Découvertes Gallimard/Histoire 中の一冊。
- (6) 本章でのボトレルに関する記述は、ほとんどすべて、Théodore Botrel: Les Souvenirs d’un barde errant, Préface de Charles Le Goffic, Réédition de 1926, Yves Salmon, 1988. の XXXV La 《Fleur-de-Lys》, pp. 197-199. によっている。したがって同書からの引用・参照については、原則として、個別に頁を注記することは省略する。
- (7) Vicomte Gustave de Kerguézec (1869-1955).
- (8) Athanase de Charette はシャレットの petit-neveu, つまり甥か姪の息子であったという。
- (9) T. Botrel: op. cit., Préface p. 15.
- (10) アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭は 1772 年 8 月 30 日生まれで、1794 年 1 月 28 日戦死。アンリは普通 Henri と綴るが、正式にはショレ市観光協会版由来書通り Henry, ただし、ロシュジャ克蘭は Rochejaquelein と綴り、由来書のほうが違っている。シャレットは 1763 年 5 月 2 日生まれで、1796 年 3 月 29 日に銃殺されたが、特に Mme de La Rochefoucauld との愛情関係は有名で、さまざまに伝説化されている。
- (11) Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, née Marie-Louise-Victoire de Donissan, Édition présentée et annotée par André Sarazin, Collection Le Temps retrouvé XXXX, Mercure de France, 1988, p. 199.

- (12) Ibid., p. 361. (1) .
- (13) この間のいきさつについては、前掲『ヨーロッパ文化研究』第9集
収載の抽稿の50-58頁に詳しく紹介してある。
- (14) Mémoires de la Marquise de La Rochejaquelein sur Guerre de
Vendée, publiés d'après les manuscrits du Baron de Barante,
illustrés d'après les estampes du temps et annotés par Maurice
Vitrac et Arnould Galopin, Nouvelle collection de Mémoires
historiques, Albin Michel, 1912, p. 140.
- (15) 前掲抽稿の54頁を参照されたい。
- (16) Françoise de Chabot: Henri de La Rochejaquelin et la Guerre
de la Vendée, Réédition de 1890, Yves Salmon, 1980, p. 56.